連載 これからの情報処理学会

— 第23回 —

ものいふ学会へ

土井 美和子
（株）東芝 研究開発センター
情報処理学会副会長

学会に対する世の中の認識

5年ほど前のことです．別の学会の研究会の主査であったときに，全国大会でのパネルを企画した折に，ベンチャ会社の社長さんに，講演をお願いしたことがあります．その社長さんとは当時，委員会でご一緒で，意見交換をさせていただき，その際に口頭でお願いしたいとも言っていたので，気軽にメールでお願いをしました．

すると，まず，「学会というのは，×× 学会のような宗教団体ですか」というのが応答メールでした．それで改めて電話にて，学会の説明などをしたのですが，当方の依頼の仕方や，その方が学会に参加することの意義を株主にどう説明するのかなど，こちらの不備をいろいろご指摘いただきました．最終的には，その学会からのニュースリリースにお名前を出したこともあり，講演が新聞に掲載されたり，後から取材もあったりで，最終的にはご満足いただけたのですが...

技術系のベンチャ会社とはいえ，研究と直接縁がないところでは，学会というのは宗教団体のことを思い浮かべるのが，世の中の認識であるということに，初めて遭遇したわけです．

ちなみに，「学会」という言葉を引いてみると，

学会（大辞泉）：それぞれの学問分野で，学術研究の進展・連絡などを目的として，研究者を中心に運営される団体．また，その集会．

学会（大辞林）：同じ学問を専攻する学者が，研究上の協力・連絡・意見交換などのために組織する会．

となっているので，一応，辞書的には，筆者の認識が正しいのです．しかし，宗教的な「学会」に比べると，学術的な「学会」は，従来，そのコミュニティの中で閉じており，社会に対して情報を発信してこなかったことは事実です．ですから，世の中で，「学会」といったときに，辞書で定義されている学術的な「学会」が想起されないというのも，紛れもない事実であります．

今，情報処理学会は学術と技術の2焦点モデルに大きく変革しようとしています．これは，従来の辞書に載っている定義のままの学会とは異なる方向に変革しようとしているということです．

つまり，技術というもう1つの焦点は，社会との接点を作るということです．社会との接点がある学会のあり方は「ものいふ学会」であると思います．

「ものいふ」こと

「ものいふ」を大辞林で引くと4つの意味があります．

(1)ことばを発する．口をきく．
(2)力を発揮する．
(3)男女が情を通じる．
(4)気のきいたことばを言う．秀句を言う．

以下，この4つの意味に沿って，
「ことばを発する」
「力を発揮する」
「男女が活躍する」
「気がきく」
学会として，情報処理学会の「ものいふ」姿を考察していきます．

「ことばを発する」学会

2006年1月23日号の日経コンピュータで「IT関連学会の憂鬱」と題された記事で，学会としての存在価値に疑問が投げかけられました．2006年1月以前では，2000年から2005年までの5年間で，わずか6件の提言しかしていません．もちろん提言がすべてではありませんが，学会から社会に向けた情報発信としては，他にプレスリリースがあるぐらいなので，提言が貴重な情報発信機会であることは事実です．情報発信量が少なければ，名前を目にすることは少なくなり，その存在を認識する機会も少なくなります．

このような点を反省して，社会提言WGが発足し，以来，2006年2月から2007年6月までの間に12件の提言が行われています[1]．それ以前の5年間の6倍にあたる提言が行われており，それなりに注目を集めるようになっています．

もう1つのプレスリリースについては，実は情報処理学会本体では行っていませんが，その下部組織である情報規格調査会で行われています．しかし，こちらは，2006年1月以前の5年間で20件のプレスリリースがあったのに対し，それ以降の1.5年間ではわずか2件しかプレスリリースがありません．MPEGやJPEGなどの標準化が一段落したとはいえ，標準化活動は変わりなく行われているので，これは情報発信量が圧倒的に低下したといわざるを得ません．

さらに問題は情報処理学会自体で，プレスリリースを行っていないことです．たとえば，日本機械学会でも「日本機械学会の動き」，日本化学会でも「化学の甲子園」など，適宜プレスリリースを行っています．電子情報通信学会では，総合大会やソサエティ大会ごとに，企画講演や先端的な研究発表などを取り上げてプレスリリースを行っています．電気学会では，毎月のようにプレスリリースを行っているだけでなく，大学・高専等の会員を対象としたプレスリリース仲介サービスも行っています．省庁でも研究会が終わって答申や報告書が出るときにはプレスリリースを行います．

人真似をすることが必ずしもよいとは思いませんが，情報処理学会の存在を広く認知してもらうためにも，研究会も含めて，プレスリリースを行う仕組みや，他の情報発信方法などを検討する必要があります．

「力を発揮する」学会

とはいえ，ただ「ことばを発する」だけでは不足です．その言葉が価値を持たなければ，耳を傾けてもらえません．つまり，言葉に力があり，対象に対して変化を及ぼすことが望まれます．

力をつけるにはいくつかの方法があります．1つがスケール拡大です．実は，日本学術会議が日本の学協会（約1,800）に対して行った調査結果（回答数748）[2]によると，会員数1,000人以下が大半であり，1万人以上は3%，3万人以上は1%にすぎません．**図-1**は，それを人文社会系，生命科学系，理工学系に分けたものを表しています．理工学系は，比較的規模が大きくなっています．

しかし，そのように比較的規模の大きい理工系でも，さらに規模を大きくするための大同団結が行われています．たとえば，化学分野では，日本化学会（約33,000人）など18の学協会，延べ11万人以上が参加する日本化学連合が6月29日に発足しています．この大連合の狙いは，「特に，日本学術会議との連携やIUPACへの対応，我が国の科学技術政策への提言，化学者の研究倫理問題，初等・中等教育における化学教育や理科教育問題への対応，報道機関を通じた研究成果等の情報発信，一般市民を対象とした啓発・普及活動，など」となっています[3]．同じく，日本地球惑星科学連合も46学会，延べ53,000人で2005年に発足しています．電気・情報関連学会連絡協議会も情報処理学会を含む5学会で延べ94,000人であり，日本化学連合に匹敵する規模であります．

情報処理学会は会員が少なくなったとはいえ，日本の学協会の中では十分，大規模であり，また，電気・情報関連学会連絡協議会という立場では，日本化学連合につぐ規模であります．裏を返せば，その規模の大きさが活かしきれていないのではないでしょうか．

実は力には，forceとpowerがあります．規模の大きさがforceであるならば，もう1つのpower，つまり能力や才覚も必要です．能力や才覚があれば，大きさを競わなくても，自ずと，「出る杭」となります．

では，情報処理学会の能力や才覚は何でしょうか．そ

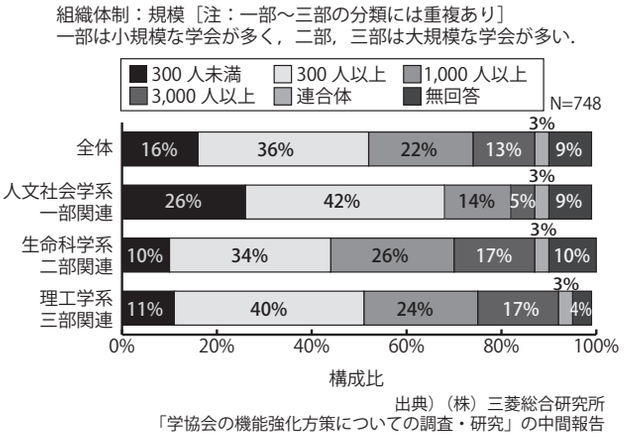

図 -1　日本の学協会の規模 [2)]

れは社会インフラとしての情報システムだと筆者は考えています．近年の航空機，鉄道，通信の情報システム事故が与えた影響からも情報システムがライフラインとなっていることが理解できます．国民を中心とした暮らしの電子情報サービスシステム設計を最適に実現する能力や才覚こそが，情報処理学会に求められています．従来は，情報の世界を対象にしていたのが，まさにその情報を活用する実世界の物流，金融，流通などを対象に，情報システムを新たに考え直すことが求められています．このような実世界の業界との対話の場を作り，実世界と情報とが相互に理解しあい，新たなパラダイムを作るために，学会ではシンポジウムなどいろいろ企画していきます．

「男女が活躍する」学会

最近ロングテールが注目を集めています．一般的にある分野の売り上げは，上位の 20% が全体の 80% を占めるというパレートの法則があり，実際に品物を並べて売るときには在庫の制限から，この上位 20% に注目していました．オンラインでは，在庫や物流にかかる経費がないので，軽視されていた 80% を組み込むことが新たなビジネスモデルであるというわけです．従来の上位 20% であるヘッドに，ロングテールを組み込むことで全体をカバーするわけです．

では学会におけるロングテールは何でしょうか．いくつかあげられますが，誤解を招く可能性がありますが，筆者は女性会員および会誌購読を中心とする会員であると考えています．

33 の学協会が加盟する男女共同参画学協会連絡会の実施した昨年のアンケート [4)] によると，たとえば，会長＋副会長の女性比率は 5/108，理事＋監事の女性比率は 41/818 です．これに対して，情報処理学会は，会長＋副会長の女性比率は 1/3，理事＋監事の女性比率は 2/21 で，学協会の平均的な女性比率を大きく上回っています．つまり，情報処理学会自身が強く認識していないかもしれませんが，実は，情報処理学会は，女性会員を取り込むというロングテールモデルに着手し始めているわけです．これをさらに進めることが求められます．

一方，研究会発表や論文投稿などはせず，会誌購読を中心とする会員に対する学会の魅力向上に関しては，従来あまり注力されていなかったのではないでしょうか．先の日本学術会議の調査 [2)] でも，掲載論文の引用が基準となる学会論文誌の評価など，ヘッドについての議論はありますが，ロングテールである会誌購読を中心とする会員への学会活動についての議論はあまりなされていません．

それに対し，情報処理学会では，IT フォーラムにより，研究ではなく，より広く議論できる場の提供により，ロングテールである会員への魅力向上を図ろうとしています．ブログ形式で自分の興味あるフォーラムに参加可能になっています．これに限らず，学会という場を借りて，いろいろな試みを行えることで魅力を作っていくことも重要でしょう．

「気がきく」学会

紺屋の白袴という言葉がありますが，それではまずく，情報処理学会自体が，デイペンダブルな情報システムを運用することが，「気がきく」ことであります．遅ればせながらではありますが，役員投票の電子化，論文誌・研究会活動のオンライン化，会員認証機能など，少しずつ進んでいます．

これらの基本ができたのち，さらにディペンダブルな情報システム構築の実証の場として，情報処理学会が機能できるようになることが，まさに学術と技術の 2 つの焦点の実現になると考えます．

参考文献
1）http://www.ipsj.or.jp/03somu/teigen/index.html
2）http://www.scj.go.jp/ja/info/iinkai/renkei/index.html
3）http://www.jucst.org/rengou/hossoku.html
4）http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/enquete.html

（平成 19 年 8 月 1 日受付）

土井美和子（正会員）
miwako.doi@toshiba.co.jp
1979 年東京大学工学系修士課程修了．同年（株）東芝入社．WP や VR，道案内システムなどのヒューマンインタフェース研究開発に従事．博士（工学）．2004 〜 05 年度理事．本会会誌編集委員会委員，日本学術会議，総務省，文部科学省などの委員やヒューマンインタフェース学会副会長などを務める．全国発明表彰発明賞など受賞．2007 年 5 月より本会副会長．